

//REPORT//

令和 5 年度ユネスコスクールオンライン意見交換会

3/14(木)開催 第 6 回

「ユネスコエコパーク:持続可能な社会を学ぶフィールド」



ユネスコスクール事務局では、令和 2(2020)年度より、ユネスコスクールオンライン意見交換会を 1~3 カ月に 1 回のペースで実施しています。今年度第 6 回目は「ユネスコエコパーク:持続可能な社会を学ぶフィールド」と題して、12 名の参加者と対話の場をもちました。

■ プログラム

開催日時:2024 年 3 月 14 日(木) 16:00~17:00

時間	内容
16:00	オープニング 趣旨説明 ACCUCO教育協力部 主任 藤本早恵子
16:05	ユネスコエコパークとESD 信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設 水谷瑞希氏
16:20	実践事例紹介 綾町役場ユネスコエコパーク推進室 河野円樹氏
16:30	ディスカッション
16:50	全体共有
17:00	クロージング

■ ユネスコエコパークとESD

以下、水谷氏ご発表の概要です。

最初に、ユネスコエコパークの制度やそれが ESD とどのように関わるのかということについて簡単にご紹介します。ユネスコエコパークとはそもそも、「ユネスコ MAB(Man and the Biosphere Programme) 計画」の中の一つのプログラムです。この MAB 計画というのは人間と自然との共生、自然資源の持続可能な利用と保全を促進するための科学研究、教育、研修を行う事業です。この事業を実践するための最も重要なプログラムが「生物圏保存地域」です。これは元々英語では Biosphere

Reserve と言い、BR と略すこともあります。繰り返しになりますが、MAB 計画の達成を目的とした国際的な登録保護地区であり、自然と人間社会の共生を実践し、研究するためのモデル地区という位置づけになっています。現在ユネスコのホームページを見ると、「持続可能な開発について学ぶ場所」と記載されています。生物圏保存地域という制度自体は、かなり昔からありますが、日本ではなかなか普及しなかったことから近年ではよりなじみやすいように「ユネスコエコパーク」という名称が用いられています。現在、世界には 134 の国と地域に 748 サイトの生物圏保存地域があり、このうち日本国内では 10 か所が指定を受けています。

ユネスコエコパークは人と自然の共生という目的を実現するために、3 つの機能が設定されています。1 つ目が保全機能で、人間の生活とその影響も含めて、生物の多様性の保全上、重要な地域をしっかりと守っていくということです。2 つ目として、自然を守るだけでなく、経済と社会の発展も掲げられています。自然と調和した持続可能な発展とモデルとなるような取組が行われることが期待されています。3 つ目の機能が学術的研究支援です。日本語で聞くとなかなかイメージがしづらいますが、英語では Logistic support と言います。つまり、保全機能と経済と社会の発展の 2 つの機能をサポートするという位置づけであり、持続可能な発展のための調査や研究、あるいは教育や研修を行います。この機能を発揮するために、ユネスコエコパークには 3 つの地域区分が設定されています。まず、人の影響を受けないように貴重な自然環境を守る地域として「核心地域」が設定されています。次に、核心地域を取り巻くように、人間活動の影響を軽減しながら利用する地域として「緩衝地域」が設定されています。そしてさらに緩衝地域の周辺、人里を含んだ地域に設定されているのが「移行地域」です。移行地域では、核心地域や緩衝地域の自然を損なうことなく利用しながら生活するように設定されています。

このように単なる自然環境の保全だけではなく、人間の生きた生活の上に成り立つ自然保護制度であることがユネスコエコパーク(BR)の大きな特徴です。

ESD の学習に用いる地域資源という観点で見ると、ユネスコエコパークにはまず、自然資源があるということはイメージしやすいかと思います。さらに、それを守り伝え活かしてきた地域の文化や歴史、伝統といった文化資源に恵まれた地域でもあるということが言えます。

ここからは、私が主に携わっている志賀高原ユネスコエコパークでの ESD の事例について簡単にご紹介します。

志賀高原ユネスコエコパークでは、元々観光協会やガイド組合が学校旅行、林間学校のようなものの支援やガイドなどを行ってきており、このガイドに対して、ESD の視点の入った環境学習プログラムを提供しています。近年では ESD の環境学習プログラムを受講するためにこの地域を訪れるような学校もあり、このこと自体が地域の観光資源に対する大きなフックにもなっています。

またこの地域では、すべての小中学校がユネスコスクールに加盟して、ESD の視点を持った学びに取り組んでいます。例えば、地獄谷野猿公苑に訪れた海外からの観光客に対し、子どもたちがリンゴを販売しています。長野県ではリンゴが特産品なので、多くの学校でリンゴの栽培体験が行われています。ある年、子どもたちの中から海外からいらっしやっている観光客の方に自分たちが作ったリンゴを販売したい、というような希望が出てきました。先生方はこの願いを受け、地域の方と調整を行っ

たり、あるいは外国語の教育を支援している ALT の先生に協力をお願いしたりするなどして実現できた、というような学びを展開しました。

また別の事例ですが、小学生が志賀高原で水の勉強をしました。源流域である志賀高原から校区内を流れる川、さらに修学旅行でその河川が流れ込む日本海まで行き、流域全体を通じて水に関する学習を展開しました。

志賀高原は自然が豊かな地域ですが、一方スノーリゾートとしても有名なように、スキー場などの開発が行われた地域でもあります。そこで、すでに使われなくなったスキー場での植林活動や、スキー場開発の過程で損なわれてしまった湿原を再生する活動が、行政や地域の団体などにより実施されています。このような自然環境に関する保全活動にも、子どもたちが積極的に参加しています。このように多様な主体の活動に参画するというのもこの地域の ESD の一つの特徴です。

私が今所属しております信州大学の志賀自然教育園では、半世紀以上にわたり、主に教育学部の学生を対象とした自然教育実習を行ってきました。そもそもこの実習が行われるようになったのは、「自然豊かな長野県で教員となる者は、自然についてよく知らなければならない」という理念に基づいているそうです。このように信州大学では自然教育実習は必修授業に位置づけられておりますが、これは全国の教員養成課程の中でも極めて稀で、特色ある授業とすることができます。また、教員養成課程の学生に対してだけでなく、現職の先生方に対しても環境教育、自然教育あるいは ESD や SDGs 実践のための研修などの支援も行っています。

社会教育の分野に関して言いますと、地域の方とともにユネスコエコパークを活かした持続可能な地域の発展を考える「ユネスコエコパークセミナー」を開催しています。このセミナーでは、ユネスコエコパークの制度や自然史、地域振興についての講演や、地域資源を探索するフィールドワークやワークショップを行っています。

さらに、信州 ESD コンソーシアムというプラットフォームでも活動しており、毎年子どもたちが日頃の学びの成果を発表したり、互いに聞き合ったり学び合ったりする交流機会を作ってきました。コロナ禍に伴って対面開催が難しくなった一方、学校現場で急速に ICT 機器が普及した結果、学校間でオンラインイベントが開催できるようになりました。そこで交流機会もオンラインイベントとして開催するようになり、オンライン化に伴い、元々は長野県内のみで行っていましたが、全国のユネスコエコパークで学ぶ学校を対象としたイベントへと拡大しました。さらに今年度は国際交流の場としてもこのイベントを発展させることができました。このイベントで発表された子どもたちの発表の様子や実践の記録、発表を見た指導者の感想などは、オンラインで公開されておりますので、(<https://esd-nagano.org/conference/introduction/2023>)ぜひご覧ください。

ここまで志賀高原ユネスコエコパークでの ESD の実践事例について簡単にご紹介した通り、ユネスコエコパークには自然資源のみならず、文化や歴史、伝統といった文化的資源にも恵まれています。さらに、ユネスコエコパークの地域では、行政や市民団体をはじめとする多様な主体が連携や協働を通じてユネスコエコパークとしての活動、あるいは地域を持続可能にしていくための活動が行われています。近年ではそれらの活動が SDGs 達成という文脈でも行われています。特にユネスコエコパークでは、活動の主体あるいは活動の先が明確になっていることが特徴であると言えるかと思えます。

そしてこのような活動を通じて多様な人材育成が行われています。先ほど紹介した学校教育での次世代育成は、特に地域内の学校すべてが ESD に取り組んでいるということは非常に大きな特徴です。つまり、ESD で学んだ世代の層が今後現役世代になっていく、地域の担い手になっていく時に非常に大きな力になるのではないかと思います。また学校教育に加えて、市民活動、生涯学習といったところにもコミットしております。ここでは連携と協働を通じてユネスコエコパークの活動の担い手を育てるということも行われております。

さて、このような志賀高原ユネスコエコパークの ESD 活動は非常に盛んなように見えますが、これは決して元々あったわけではありません。実は 2014 年に行われた志賀高原ユネスコエコパークの拡張が、地域の学校のユネスコスクール加盟のきっかけでした。つまりこの地域の学校が ESD を盛んに行うようになった背景に、ユネスコエコパークの活動があったということです。そしてここまで見てきたように、ESD がユネスコエコパークとしての活動そのものを活性化させることにもつながっています。つまり、ユネスコエコパークとユネスコスクールの相乗効果による活性化があるということです。

ではそのほかのユネスコエコパークの現状についても簡単にご紹介します。まず、白山ユネスコエコパークでの事例です。高山市荘川町では郷土教育において地域連携が盛んに行われています。この背景となっているのが地域の町づくり協議会の方の危機感でした。荘川町は元々、環白山をめぐる周辺の文化圏に所属していたのですが、平成の大合併で高山市に合併しました。その結果、だんだん文化・経済圏が高山市の方に結びついていき、元々あった環白山の文化・伝統が希薄になってきたという危機感を感じたそうです。そこで、地域アイデンティティを深めていくという目的で地域学習の支援を行っているそうです。

南アルプスユネスコエコパークにある飯田市の遠山郷は、元々 ESD が積極的に行われていた地域ですが、ユネスコエコパークやジオパークの活動を通じた地域資源あるいは地域への価値の付加、多様な連携、国際交流といったことが期待されているそうです。

このように、ユネスコエコパークには自然資源、文化資源、さらに社会資源といった多面的な学習資源があります。そしてユネスコエコパークは国際的なプログラムですので、地域から全国、あるいは世界へもつながっていくような取組になることが期待されます。また、ESD を通じて学校と地域間の連携が強化され、活動が活発化することによって、その間の相互作用や地域の活性化も期待できると思います。

■ 実践事例紹介

以下、河野氏ご発表の概要です。

綾町は九州の南部、宮崎県の中央部に位置する非常に小さな町です。総面積は 9,500 ヘクタール、人口は 6,700 人ほどです。九州中央山地の険しい山の下の方に位置し、面積の約 8 割が森林、その 2 キロ四方の一部にすべての人口が集まっています。このような地理的な背景もあり、昔は森の資源を活用していた時代もありましたが、今では残った森を守り、日本でも最大規模の照葉樹林という常緑広葉樹林が残されているエリアとして知られています。このような町のため、昔から人と自然との共生を図ってきた町でもあります。

自然を守ってきたおかげで、自然の恵みを生かした産業活動を展開してきました。半世紀以上前から少しずつ森を守る活動が行われ、農業を基盤とした色々な取組、産業活動を展開してきました。手作り工芸だったり、お酒造りだったり、そういった今行われている産業のほとんどが自然を破壊しない、無理のないような方法で行われています。このような循環型の地域づくりを心掛けてきたことが評価され、2012年に綾町全域を含むエリアがユネスコエコパークに登録されました。

ユネスコエコパーク登録の地域には3つの機能、3つのゾーニングが設けられており、それぞれの対応する取組を行ってきています。ユネスコエコパークに登録されると10年ごとに定期報告レビューがあるのですが、私たちは2022年に提出しています。この10年間を振り返ってみると、登録の2年後の2014年に、綾町内に1校ずつしかない小学校と中学校がユネスコスクールに認定されました。それ以降、綾町内には高校以上の高等教育機関がないので、それを補うために宮崎県内の大学と包括連携協定を結んだり、色々な活動拠点の施設を整備したりしてきました。

2018年には病院の跡地を改修して、展示室や調理実習室、研修室を設け、大学との連携のサテライトオフィスも含めたユネスコエコパークセンターを開設しました。このような施設を設けたことで教育機関との連携もより増え、より一層多くの取組ができるようになりました。

次に、教育機関との連携について紹介します。綾町では小学校、中学校1校ずつのほかに町立の保育所2か所を含めて4か所の幼稚園・保育所があります。限られた施設しかないところですが、逆にそれをうまく利用し、特に2014年に小学校・中学校がユネスコスクールの認定を受けてから、幼保小中が連携した取組を積極的に行ってきました。「ふるさとキャリア教育」は、幼稚園・保育所、小学校、中学校のそれぞれの過程で計画的に学ばせていく中身になっています。我々ユネスコエコパーク推進室のメンバーも小学校4年生の総合的な学習の時間に森や水をテーマにした切り口で授業を行ったり、中学校1年生ではユネスコエコパーク全般の話や、近隣の町やジオパークとの比較を行ったりしています。こうして地元のことを深く学ばせていくという取組になっています。

具体的に、本センターでは、講話・講義や研修会の実施のほかに、宮崎県内の高校(SSHの指定校)との活動や、地元の大学との実習や共同研究の実施等、教育と研究の分野で対応しています。利用者は、年間で言いますとコロナ禍明けで5,000 - 6,000人くらいいます。

本センターにおける一番中心的な取組として、「綾町イオンの森づくり」を紹介します。2013年から町有地の杉を伐採し、杉の材で綾中学校の校舎を建て直したのですが、その伐採の跡地にイオン環境財団の協力を得て、中学生や町民が植樹活動を続けてきました。当初はイオン環境財団が全国で行っている植樹と何ら変わらなかったのですが、途中からユネスコエコパークに登録されている地域なので、何か特別な目的があったほうが良いということになりました。綾町は昔から自然生態系農業と言って、化学肥料や農薬をあまり使わない農業を町内全域で展開してきました。そのおかげでニホンミツバチがたくさん飛んでくることを宮崎大学の研究室が発見し、2013年から調査してもらっています。イオンの森のすぐ下には畑が広がっており、その中間地点に日向夏みかんという宮崎県の特産品の果樹園があります。日向夏みかんはほかの木からの花粉がつかないと実がならない性質(自家不和合性)を持っているのですが、ミツバチがたくさん飛んでくることで、ミツバチが日向夏みかんの花粉を運んでくれます。農家の人はミツバチがいると喜び、ミツバチの餌となるような花がたくさん咲く樹

枝をよりイオンの森に植えることでミツバチも喜びます。このサイクルによって、安心安全で、科学的な根拠が得られるブランディングもできるため、みんながウィン・ウィンになるような森づくりをしようという取組が始まっています。中学生も植樹活動に参加するだけでなく、先輩が植えた木がどれくらい成長してCO₂を吸収しているのかを毎年計測する等、探究学習の場に活用しています。また、「綾町イオンの森エリアマップ」も作って町外の方にもPRしています。宮崎県内で一番大きなショッピングモールにもマップの展示を作っていました。

イオンの森以外にも新たな活動を行っており、綾町の在来種と園芸種が混在する多年草の花壇でナチュラルガーデンを作りました。また、地元の小学生・中学生が町づくりに関わっていけるような、小さな町ならではの取組もしたりしています。例えば、小学生に町の未来図を描いてもらったところ、それに対して緑地がもっと多いほうが良い、という意見が出たため、小学生が実際に参加して芝の広場を作っていく取組を行いました。またその延長線上で、毎年10日間で数万人の来場がある、苔山の上にひな人形を飾る「ひな山祭り」において、小学生が自分たちでひな山を作る取組を行ったりもしています。さらに中学生では、綾町に照葉樹林を復元していこうという場所があるが、鹿が苗を食べてしまいなかなか回復しない中、中学生がドングリの苗を育て、3年後に森に戻すという新しい活動が始まっています。

こうした取組はそれぞれ単発で行ってきたものもありますが、ユネスコエコパークの視点からよくよく見てみると、例えばイオンの森は、子どもたちが町民やイオン環境財団の方と一緒に森づくりをしています。そして生物のたくさん住む森は環境教育に活用され、育った森はいずれ地元の工芸家の方に利用してもらう予定です。また、ナチュラルガーデンは色々な人たちが集まって交流する憩いの場であり、同時に在来種も保全できます。さらに、奥山と里地をつないでいる場所にはミツバチのような昆虫層がたくさんいることが分かってきました。ミツバチのような昆虫がたくさんいることは、日向夏みかんや他の野菜栽培など、綾町の基幹産業である農業において農家さんにメリットが得られます。

このように行政だけではなく、民間の企業や地元の大学なども巻き込み、それぞれの取組の中に子どもたちの関わりを持たせ、自然と共生した町づくりに子どもたち深く関与してもらおうという、ユネスコエコパークと教育の分野の関わりを目指しながら活動しています。

■ 全体共有

以下、ディスカッションにて話し合われた主な内容です。

- 話し合いの中で、いくつかの疑問点・考えが挙がった。
 - 「地域から全国へ」という話があったが、当校(高校)は周りにエコパークやジオパークがない。そのような環境においてどのような活動ができるのか、具体的な事例を知りたい。
 - ユネスコエコパークとジオパークの違いについて知りたい。
 - 今回の話は自然科学系の方が取り組みやすいと思ったが、文系的な要素についても、ユネスコエコパークでどのような取組ができるか知りたい。
 - 環境的に恵まれていれば色々な取組ができるが、ユネスコスクールに加盟している

学校として学校から地域に向けてユネスコエコパーク・ジオパークへの取組・整備についても訴えかけるような働きかけをするのも良いと思った。

- 海外の具体的な取組もできれば知りたい。
- 実際に学校現場でユネスコエコパーク・ジオパークの取組を考えた時に、教科としてどのような科目の扱いが可能になるか。話では教科横断型として取り組むのが良いということだったが、事例として聞きたい。

➤ (上記に対する水谷氏の回答)

- ユネスコエコパークやジオパークでの学びが理系的な観点でないと難しいのかということについては、恐らくそうではなく、むしろ理系的な観点だけでないので ESD が広がったのではないかと思う。勝山市の学校の先生方にユネスコスクールとしての活動をどのように活性化していったのかを伺ったところ、一つの大きなキーポイントが、ただ単に理科的な学びでの環境教育ではなく、社会の課題と結びつけて展開していく方が、発展性があるということに気がついた、ということだった。その観点で言うと、特定の領域に限定してではなく、社会課題とどう結びつけていくかという観点で学びを設計すると良いのではないかと思う。
- ユネスコエコパークは ESD につなげやすいが、ユネスコエコパークやジオパークが近くにないといけないかという点も必ずしもそうではなく、それぞれの地域ごとの学習資源をうまく掘り起こし、それを活用する。あるいは地域の課題をうまく取り入れていくことができれば同じような学びができるのではないか。
- 環境学習プログラムの話をしたが、例えば林間学校などの機会を通じて学びのきっかけの部分である、SDGs に関する取組がどのように行われているか、そのためにどのように活動している人がいるか、といったところを吸収したうえで地域に持ち帰り、地域の課題と結びつけて考えていくという展開はできるのではないかと思う。
- 教科とより密接に結びつけた学びについては、ジオパークの方が進んでいるのではないかと思うが、地学分野に関連するようなカリキュラム、それぞれの單元に対してどのようなコンテンツを提供できるかを整理しているところもある。

➤ (上記に対する河野氏の回答)

本日紹介できなかったところで、地元の限界集落のようなところの情報のアーカイブ化など、色々な取組をやっている。実際地域で課題とされていることに対しての取組を、ユネスコエコパークとしてももちろんのこと、うまく学校と連携していくことでユネスコスクールの学びの場でも活用できるのではないかと思う。

- ユネスコスクールとユネスコエコパークの関連について知りたいという問いに対し、ユネスコスクールはユネスコエコパーク・ジオパークだけではなく、あくまでも ESD を実践する場であり、自分で考えて解決していく力や、自分たちで提案し、動き出せる力を身に付けることができる。そして子どもたちが将来意見を出し合えれば町づくりになり、ユネスコエコパーク・ジオパークにもフィードバックをしてくれるようになる、という話があった。

- ユネスコエコパーク・ジオパークが近くにある等、環境が恵まれていればユネスコスクールの活動が充実する、というわけでもなく、持続可能な地域づくりができていけば、すべてが紐づいてくるという話があった。ユネスコエコパークなどの大きいネーミングにとらわれず、行政として、教育としてどうしていくか、目の前にある地道な課題と向き合っていくことを大事にしていけばつながっていくということを参加者と共有できた。
- 今回はユネスコエコパークの事例紹介ということで自然との共生を目指している活動のいくつかを紹介していただいたが、決して恵まれた環境だからこそのものではなく、地域に合わせた学習資源をうまく探し、それをどう生かして子どもたちの学びにつなげ、子どもたちに何を身につけさせたいかということを教師がしっかり持つことによって成り立つものだというを示していただいたことが一番だと思う。
- 当校が関わっている NPO 法人や林間学舎について、そこでのコウノトリの学習や星空の観測もこうすればより子どもたちの学びにつながるのではないかなど、まだ既に出来上がったプログラムを子どもたちに示している行事が多い中で、より子どもたちが主体者となるような学びをさせるためには、こういった手立てがあるというヒントを多々教えていただいた。また、比較対象のものを明示すれば子どもたちはおのずと違いから問いを見いだすことができるという言葉があり、まさしくそうだと感じた。問いを引き出すためには身近なもの、比較対象できるものを探しながら、子どもたちがどう違いを見出すか、そこから問題解決に結びつけるためには教師はどう働けばよいかということを教えていただいた。



[オンライン意見交換会の様子]

※オンライン意見交換会に関し、お申込み方法などの詳細は、[ユネスコスクール公式ウェブサイト](#)内「最新情報」、[ユネスコスクール公式 Facebook](#)に掲載中です。ぜひご参加ください！